



徳島市民病院85年の歩み（4）



徳島市病院事業管理者
露口 勝

8. 新徳島市民病院（北常三島町）

現在、北常三島町2丁目に聳え立つ新徳島市民病院は平成15年に基本設計、平成16年に実施設計が策定され、同年9月より新病院の建設が着工された。今回の建設は狭隘な旧病院隣接地での建て替えとなり、工期は2期に分割された。1期工事の地盤掘削中に病院周辺家屋の地盤沈下をきたし、工事は一時中断され、工期は予定より大幅に延びることになった。これは建設地が吉野川河口に近い場所であり、軟弱な地盤によるものである。

新病院1期工事の落成を祝う開院式は平成20年1月5日当病院において举行された（図21、22、23）。原秀樹徳島市長（図24）をはじめ、副市長、市議会議長、市議会議員など多くの市関係者のほか、徳島大学関係として香川征徳島大学病院長（図25）、徳島大学医学部教授、県関係として里見副知事、保健福



図22. 開院式（2F 外来ホール）



図23. 開院式（テープカット）



図21. 開院式



図24. 原市長



図25. 香川徳島大学病院長

祉部長、県議会議長ならびに徳島区選出の県議会議員、医師会関係として川島周県医師会長、豊崎纏市医師会長、郡市医師会長ならびに医師会会員など招待者142名を含む関係者300余名が出席して盛大に行われた（図26、27、28）。



図26. 開院式（1F 待合ホール）

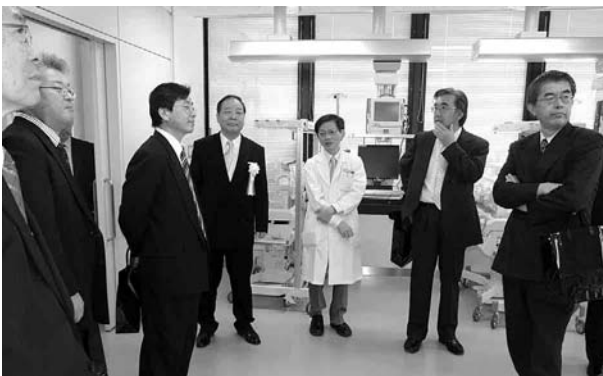


図27. 内覧会（NICU）



図28. 内覧会（屋上ヘリポート）

翌1月6日には一般市民への新病院内覧会が開催された。新規導入されたCT、MRI、リニアックなど高度専門医療を担う新病院の医療機器が紹介され、それと同時にアメニ

ティの良い入院病室や外来診察室なども公開された。多くの市民や地域住民が来院され、新病院の諸設備を見学した後、12階の屋上ヘリポートから吉野川河口に広がる抜群の眺望を楽しまれた（図29、30）。



図29. 11F 病室からの眺め



図30. 屋上より吉野川を望む（国道11号線）

旧病院から新病院への引越しは、平成20年1月25、26、27の3日間をかけて慎重に行われた。今回は隣接地への移転であり、物品の輸送や患者の搬送は順調に行われ、何のトラブルも発生しなかった。特筆すべきこととして、移転当日に思いがけない出産があり、新病院の手術室で初めて手術（帝王切開術）が行われ、元気な双生児が生まれた（図31）。新しい病院の門出を祝福するような記念すべき出来事のひとつである。

新病院は平成20年1月28日から開院となった。電子カルテはすでに旧病院において導入され、職員は電子機器の操作に慣れていて新病院への移行は順調に行われた。その後旧病

この旧病院から新病院へ移行する過程で、徳島市は度重なる病院赤字からの脱却を目指して、市民病院の経営形態を変更するという大きな病院改革を断行した。全国的にも公立病院の財政赤字が問題となり、徳島県も地方公営企業法の取り扱いを変更して病院事業管理者を招聘したところであった。

平成18年に徳島市は病院の経営形態をそれまでの地方公営企業法、一部適応から全部適応に変更し、独立性を高めた組織による医療現場と直結した運営を図り、経営健全化を目指すことになる。そして前にも述べたように病院事業管理者として徳島赤十字病院副院長の湊省先生を招聘したのである。湊先生は市民病院を見て、急性期医療を担う地域の中核病院と位置づけ、①救急医療の充実、②密度の濃い連携医療の構築、③魅力ある臨床研修病院の3つの病院目標を掲げ、診療実績として紹介率および逆紹介率を上げること、入院患者の在院日数の短縮を図るなど、急性期病院としての経営指標を明確に打ち出して改革していく。

私は病院長として市民病院の医療の質を向上させるために、平成18年に前倒しで旧病院に電子カルテを導入し、懸案であったカルテの一元化を行い、病院機能評価の受審を進めるとともに、DPC対象病院になることを目指した。入院病床については、空床が目立った一部の病棟を閉鎖してダウンサイジングを行い、7対1入院基本料の施設基準をクリアする看護体制を早期に敷くことが出来た。

平成20年1月の新病院開院とともに初期臨床研修医が大挙押し寄せ、市民病院に強烈なインパクトを与えた。何よりも若い医師のエネルギーで、それまで沈滞気味だった病院の雰囲気は明るくなり、市民病院全体が活性化されたのである（図36、37）。また研修医の

増加は、病院にとっても指導医の養成をはじめ、臨床研修病院としての教育体制を一層充実させていくことになった。



図36. 初期臨床研修医（屋上にて）



図37. 臨床研修終了式（女医3人娘）

この平成20年にDPC対象病院の認可を受けるとともに、県から地域医療支援病院の承認も得られた。平成21年に病院機能評価機構の認定病院（図38）となり、平成22年に地域がん診療連携拠点病院にも認定された。また、厚生労働省において、多年にわたり産科医療の確保に寄与した病院として厚生労働大臣表彰を受けた（図39）。続いて平成23年に高度な周産期医療を担う施設として地域周産期母子医療センター、平成24年3月にはDMAT病院（図40）、次いで災害拠点病院の認定も受け、市民病院は名実ともに高度急性期医療を担える地域の中核病院として、その診療体制を整えることができたのである。



図38. 日本医療機能評価機構認定証



図39. 厚生労働大臣表彰

このように医療の質を高め、各種の認定条件をクリアして施設認定を受ける中で、少子高齢化社会に向けて救急医療、小児・周産期医療、緩和ケアを含むがん医療、さらには高齢者の運動器障害に対する脊椎・人工関節セ

ンターの新設など専門的な医療機能の強化を図り、市民の医療ニーズに応える診療体制を構築していった。市民病院の一連の改革は未だ道半ばであるが、平成22年度の病院収支決算で長年の懸案であった財政赤字からの脱却を果たし、市民病院としては19年ぶりに経常収支の黒字を計上することができたのである。そして平成23年度も引き続き黒字会計を計上できそうである。

病院収支の改善は診療報酬制度の改定に多くを依存しているが、最近の市民病院の経営改善は、長年にわたって負のスパイラルに陥っていた財政赤字からのV字回復であり、新病院建設を好機と捉え、この時代に相応しい新しい医療への変革に挑戦した市民病院全職員の努力の賜物である。徳島市のような病床過剰地域においては、都市型の医療体制を整えることを施策の機軸として、より専門性を発揮した病院の役割分担と特色を目指して、すべての職員が医療の質の向上を図るとともに経営改善に努めた結果が市民や医療関係者に認知され、信頼感を得つつあるといえるのではないだろうか。

ここに至るまでには多くの方々の温かいご指導とご支援をいただいたことに感謝している。とりわけ徳島市の原市長をはじめとする



図40. DMAT 協定締結式



行政や市議会の皆様方、さらには徳島大学病院の各医局および徳島市医師会員をはじめとする多くの医療関係者の方々に対して深甚なる謝意を申し上げます。また、市民病院をご利用いただいた多くの徳島市民および県民の皆様にも心より御礼申し上げます。

以上、昭和3年に市立実費診療所として誕生してから85年に及ぶ徳島市民病院の歩みを、徳島市史などを参考にしながら私見を交えて概観してみた。私はそのうち最近の30年間をこの病院にお世話になったことになるが、今回改めて市民病院の古い資料を拝見していて、この病院には先人たちから伝えられてきた素晴らしい伝統と文化が脈々と息づいているように感じられた。その先人たちが何を考え、どういう犠牲を払って何を達成し、何を達成できなかったのか、どれを継承していくか、捨てるものがあるとしたら何か、われわれは過去の蓄積の上に現在があるということをお忘れしないで、先人たちの思いも結集して、更なる市民病院の改革に挑戦していきたいと心を新たにしている。ものを作り直すというのは自分たちの歴史に真摯に向き合うことでもある。

わが国は昨年3月11日未曾有の東日本大震災と福島第一原発事故による複合災害を受け、その復旧・復興に国を挙げて取り組んでいるが、少子高齢化、人口減少社会を迎え、先行き不透明な閉塞感の漂う困難な時代に突入している。ユーロ危機など世界同時経済不況もあり、病院を取り巻く環境は依然として厳しい現状にあるが、市民および地域住民の命と健康を守るため、市民病院は新しく再生し、地域の医療機関と機能分担・連携を強化しながら良質な医療を効率的に提供し、継続して成長していく。そして「この病院がある

からこの街に住んでみたい」「この病院があったからこの街に住んで良かった」といわれるように、将来にわたって市民から信頼され、水都徳島の豊かな街づくりに医療面から貢献すること、これが公立病院としての徳島市民病院の使命であり、責務であるといえよう。

最後に市民病院に関する古い資料が散逸することなく徳島市史編さん室に残されていたことに感謝するとともに、それぞれの時代の中で困難な舵取りをされた歴代の市民病院長の名を記して本稿を終わることにいたします。今後とも市民病院をご支援賜りますようお願い申し上げます。

徳島市民病院歴代病院長（年月日は就任日）

初代	小山順治	昭和5年7月21日
2代	永谷 鼎	昭和21年8月20日
3代	日置達雄	昭和27年3月15日
4代	山口 寿	昭和35年9月16日
5代	岩鶴龍三	昭和36年11月15日
6代	清 英夫	昭和39年1月1日
7代	角野義三	昭和41年1月1日
8代	岩崎 基	昭和41年9月17日
9代	矢野嘉朗	昭和47年6月2日
10代	山田憲吾	昭和47年10月17日
11代	油谷友三	昭和49年1月1日
12代	矢野嘉朗	昭和51年6月2日
13代	阪口 彰	昭和59年4月1日
14代	先川知足	平成7年4月1日
15代	森本重利	平成8年4月1日
16代	日下和昌	平成16年4月1日
17代	露口 勝	平成18年4月1日
18代	惣中康秀	平成22年4月1日

主な参考図書

- ・徳島市史 第5巻 民生編 保健・衛生編 平成15年刊
- ・小山 順治著 一診療所長より大学病院長まで 1969年
- ・徳島市医師会史〔85年の歩み〕（徳島市医師会）
- ・徳島大学医学部50年史（徳島大学医学部）